

## マルサス人口論に関する人口波動論的解釈への批判的検討

佐藤 宏（上武大学）

マルサス『人口論』初版は、冒頭で明言しているようにゴドウィンの平等社会論への批判をその目的としている。主題は「人口はつねに生活資料の水準に押しとどめられなければならないこと」と明示されている。

そこでマルサスは人口と食糧の増加の比率の差異を主張し、人口・食糧の増加比率差異こそがマルサス「人口原理」である—とマルサスと同時代の識者たちは考えた。彼らが人口原理を人口・食糧の増加比率差異として捉えたのには無理がなかった。なぜなら、マルサスは「人口(増加力)と土地の生産(力)との、二つの力のこの自然的不平等」に比べれば、その他の論点は「些細な副次的な問題である」ともしたからである。

マルサスは人口に関する「二公準」「三命題」を提出した。以下、初版に示された「公準」からみてみよう。「第一、食糧は人間の生存に必要なこと」「第二、両性間の情念は必然であり、ほぼ現在の状態のままであり続けられること」

マルサスは上記二公準から「三命題」を引き出した。以下は六版。

- ①「人口は必ず生存資料によって制限される」
- ②「人口は、あるきわめて強力かつ明白な妨げによって阻止されなければ生存資料があるところではつねに増加する」
- ③「これらの妨げ、および優勢な人口増加の力を抑圧し、その結果を生存資料と同じ水準に保つ妨げは、すべて道徳的抑制、罪悪および窮乏に分解することができる」(周知のように「道徳的抑制」に関しては第2版から加筆された)。

マルサスは「人口増殖原理」と「生存資料によって規制される人口」(規制原理)は均衡化すると考えた。「規制原理」は南の造語である。

だがマルサスが人口問題を論じるにあたり、「規制原理」の発現に関心を寄せていたことは間違いなく人口に対する「妨げ」論に結びついている。実際、マルサスは「必要という緊急の、広く行き渡った自然の法則が(動植物の数)を一定の限度内に抑制する。植物の類も動物の類もこの偉大な制限法則の前で萎縮する(動植物の数)は筆者。」と述べている。

人間も、その制限法則から逃れることはできない—としている。従って、南が言うように、マルサス「規制原理」は「人口は食糧の水準に引き戻される」原理であるとするのは妥当であるといえよう。その具体的「作用」として働くものとして、死亡率に関する積極的抑制と予防的抑制をマルサスは挙げた。

マルサスによれば「増殖原理」、「規制原理」の相互作用が生じることで「幸福と悲惨とが交互に現われるひとつの波動運動」がうまれることになる。

これが、南氏の論じるころの、マルサス人口波動論と称されるものである。

経済的な豊かさ・貧困と人口の増加・減少関係として生じる運動、人口の「増殖」、「規

制」という二原理の交互作用から人口は不断の振動の中に自己をおくものとならざるを得ず、増加・減退、進転・逆転の波動を反復するマルサスは考えた。

南は、この波動運動を「人口擺動の理論」と呼び、マルサス人口論の本体であるとした。そして「動態的・発展史的な人口擺動の周期性」がマルサス理論の頂点であると捉えた。

南のマルサス人口原理解釈に、森下氏は疑問を差し挟んでいる。マルサスの場合、「増殖原理」という語句の用法は実に多様であり、必ずしも南の言う意味での「増殖原理」とマルサスのそれが一致していないということが森下の南批判の論拠であった。また、中西氏は南を次のように批判する。

すなわち、南は「波動運動」を「増殖原理」と「規制原理」の「交互作用の結果としてしか考慮しなかった」と。人口原理と経済的考察を結びつける契機を見落としたと批判する。森下・中西の批判は妥当であると本稿も同意する。

我々は、こうした諸見解をもとに、マルサス人口原理・人口理論は本来どのようなものであったかを再検討する必要がある。そこで、その人口原理を引き出すことになったマルサスの人口命題がどの様なものであったのかを知らなければならない。

ところが、マルサス「人口の原理」とは何であるか—という問いについて、はっきりと定まった見解は未だにないようである。というのもマルサスが人口原理という言葉を経験的な意味で用いたからである。従ってマルサスの思想の核である「人口原理 principle of population」が何を示しているかを巡っては様々な解釈が提示されてきた。だが、不思議なことに1798年『人口原理に関する一論 An essay on the principle of population』が出版された当時のイギリスでは、マルサスに向けて数多くの批判があらわれはしたが「人口原理」解釈自体を巡る議論はほとんど生じていない。実際、マルサス『人口論』初版の目的のひとつはゴドウィン批判にあったにも関わらずゴドウィン[1801, 71-3]は次のように述べている。

「わが著者〔マルサスのこと〕の労作の論拠たる人口と食糧の比率は論争の余地のないものであり、また経済学という科学にとって価値ある収穫物をなすものと私は考える」

ゴドウィンはマルサスの示した人口の原理を人口と食糧の比率の差異と捉えたことについて異論を提示してはいない。ゴドウィン「人口原理」批判は、例えば人口原理の例証をマルサスがアメリカの事例に求めたのに対し、ゴドウィンはスウェーデンの事例を用いて批判したことであろう。

人口は生存手段よりも速く増加する傾向がある—というマルサスの見解に対して、シーニアは、それは特別な事情のもとでおこることであり、マルサス人口原理は一般的命題にはなりえないと批判した。シーニアの見解は、食糧は人口よりも速く増加する傾向がある—という点にあった<sup>3</sup>。シーニアのマルサス批判は、マルサス「人口原理」そのものと、人口原理解釈に踏み込んだ点で他のマルサス批判者とは一線を画すものであったが、マルサス「人口原理」自体を追求してはいない。

マルサスと数多くの論争を繰り返したリカードウにあってはマルサス「人口原理」を積

極的に自らの経済学的体系に取り入れた。マルサス人口原理は、同時代の人々にあつてはほぼ共通し人口と食糧の比率の差異として認識されていた。こうした常識的見解ともいえるマルサス「人口原理」解釈に異を唱えたのが、南亮三郎であった。本報告でも検討するように南は独自のマルサス「人口原理」解釈を提示し、日本人口論史の礎をつくった。

近年、中西は南亮三郎と吉田秀夫のマルサス『人口論』解釈を対比し詳細な検討を行っている。その上でマルサス『人口論』解釈として南理論の不整備を中西は指摘している。

筆者は以前、『人口論』と『経済学原理』における「価値論」領域の接点に関して若干の考察を行った。そこで筆者はマルサスの人口学的考察と経済学的考察は分断し理解するのではなくマルサス体系として統一的に捉えるべきであると考えている。従ってマルサス経済体系を理解するに当たり、マルサス人口原理をどのように受け止め・どのように定式化するべきか—は非常に重要な課題である。

『人口論』と『経済学原理』の接点を論じたものでは、例えば人口＝需要、食糧＝供給という図式がある。だが、人口原理に関して十分な遡及がなされていない。

本報告の狙いはマルサス「人口原理」再検討をすることにある。

南理論・中西論を通じて考察することにある。南は人口原理を人口波動論へ昇華させ、人口原理＝人口波動論とした。だが、筆者は人口原理≠人口波動論と考えている。

この点は、中西論に同意している。すなわち、人口原理は人口波動論のことを示してはいない。

しかしながら、中西論に見られる人口波動論からマルサス「食糧先行論」を汲み取る見解には同意することはできない。「食糧先行論」は人口原理中からの解釈であり、人口波動論ではむしろ人口先行論が説かれていると本報告は考えている。

マルサスが食糧先行論・人口先行論のどちらを採っていたか—は『人口論』と『経済学原理』を結びつける上で重要な視点である。事実、中西論では、マルサス食糧先行論からマルサスの有効需要先行命題を説く。

或いは、マルサス食糧先行論を説くホルンダーによれば、マルサス人口命題とは食糧増産のみが人口規模増加を保障し、食糧が算術的であっても無限に増大するならば、人口にもまた限界がない—としている。

しかし、これは、第一に人口原理の誤読であり、第二に、人口波動論との区別がついていないという点で評価できない。

本報告では、人口原理をロジスティック・モデルとして捉えている。人口原理は食糧先行論であり、人口波動論は人口先行論として位置づけている。また、そう捉えなければ『人口論』におけるマルサスの意図と、経済学的考察への接点を正確に汲み取ることができないだろう。

こうした諸議論の整理と解明のため、本報告では人口波動論における問題点、食糧先行論の問題点とマルサス想定モデル、人口原理と人口波動論の相違、そして人口原理と人口波動論の接点を論じ、最終的に人口原理・人口波動論と経済学的考察の接点を論じる。